別記様式第３号

学　位　論　文　要　旨

氏　名　　中根 征也

題　目　ASD特性のある子どもの運動と感覚特異性についての研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究は，自閉スペクトラム症（ASD）特性のある子どもたちに見られる行動上の困難が，社会的コミュニケーションの特性のみならず，感覚特異性や協調運動の制御と密接に関連しているという視点から，その特性理解と教育的支援の構築を目指したものである。特に，特別支援教育における「自立活動」を身体・感覚・運動に基づく自己調整の力を育てる教育領域として捉え，身体への働きかけを通して行動の安定や学習参加を支える支援の意義を明らかにした。

第１章では，ASD 特性のある子どもの感覚特異性と運動の困難さが，情動の不安定さや学習場面への適応の難しさに影響すること，加えてそれらが行動問題として現れる可能性について整理した。さらに，我が国における ASD 特性のある子どもたちへの運動支援に関するスコーピングレビューを行い，9 件の文献を抽出した。結果，運動支援はバランス・協調運動などの基礎的運動能力の向上だけでなく，他児との関りや活動参加など社会的適応力の改善にも寄与する可能性が示唆された。一方で，国内研究は症例報告が中心であり，体系化やエビデンス構築が十分でないことが明らかになった。

第 2 章では，未就学児を対象に ASD 特性のある子ども（ASD 群）と定型発達の子ども（TD 群）のバランス能力を比較した。その結果，ASD 群は静的・動的バランス能力のいずれも TD 群に比べて有意に低いことが示された。加えて，行動の落ち着きや注意制御が，身体の安定性と密接に関連していることを示した。すなわち，ASD 特性のある子どもに対する行動支援は，行動そのものに直接介入するだけでなく，姿勢制御など身体からの支援も有用である可能性を示した。

第３章では，特別支援学校に在籍する児童生徒を対象に調査を実施し，行動問題に課題を有する児童生徒の多くは，感覚特異性および協調運動能力の課題が同時に認められることを明らかにした。加えて行動問題は，環境調整・身体調整・活動構造化の 3 つの観点から教育的に支援することによって改善する可能性があると考えられた。すなわち，行動問題を「指導が困難な行動」としてではなく，「身体と感覚に基づいた支援が必要である」として捉え直す視点を見出している。

第 4 章では，これまでの知見を統合し，特別支援教育における支援の中核に「身体を通じた教育」の概念を置くことの意義を論じた。自立活動における運動支援は，子どもたちが身体感覚を手がかりに自己の状態を把握・理解し，活動の選択や行動調整を自ら行うことを可能にする教育実践である。さらに，姿勢制御・運動分析に関わる理学療法の専門性は，教育現場における支援の根拠と具体性を補完し，教育とリハビリテーション医療の協働を促す役割をもつと考えている。

以上より，本研究は，ASD 特性のある子どもたちの行動問題への支援において，身体と感覚に基づく身体的アプローチを自立活動の中に体系的に位置づけることの重要性を明らかにした。今後は，教育現場における継続的な実践研究と学校と医療・療育機関のさらなる連携強化が求められる。